

太田東西かわら版

おんころころ せんだりまとうぎ そわか

2026. 1

「疑問」⇒「苦悶」⇒「学問」

～学び続けた 60 年の人生～



1966 年 1 月 31 日 丙午 生まれ。太田憲一、還暦を迎えます。
丙午は燃え盛る火の年。年男&還暦の年ということもあって、今年の正月は**赤一色**で過ごしました。諏訪神社でも人一倍、目立っておりました(笑)。

人生のおよそ半分を太田東西薬局とともに生きて来て思うことは・・・
何かおかしいと疑問を覚えては、生き辛さを感じ、苦悶から抜け出そうと
真実を求めて学問し続けました。「疑問⇒苦悶⇒学問」。我が人生はその
繰り返しだったと、振り返って思います。

10代は「学校教育」に疑問を感じ苦悶しました。

中学、特に高校時代は暗黒の時期。制服、持ち物、何から何まで制約され、型にハマようとする学校が嫌でたまりませんでした。

高校2年生の時、「薬剤師になろう」と自ら決意しました。そのためには薬科大学を受験する必要がある。学校は嫌いでしたが、目標があったので通学と勉強は続けました。閉塞感から抜け出したい思いから、東京に行く決めましたが、担任から「私学で、しかも東京とか、親に負担をかけるなよ。頑張れば長大薬学部に行ける。東京に行く必要はない」と反対されましたが、反抗して夢を貫きました。生徒の可能性よりも「偏差値」「国公立大学〇人合格」を優先させる学校の事情。当時しっかり感じ取りました。

20代は「医療（西洋医学）」に疑問を感じ苦悶しました。

目指した東京薬科大学の合格を果たし、大学生活は一転、バラ色でした。親元を離れての一人暮らし。寂しく不安もありましたが、全国から集う学友との親交・縁は、今でもかけがえのない人脈・財産になっています。漢方研究会の後輩だった麻里ちゃんにも出会い、ゴールインできたし♥。

念願の大学病院の薬剤師にもなれてイケイケの20代でしたが、そのバラ色も陰りを迎えます。理想と現実のギャップに苦悶し始めたのが3年目。

「薬漬け医療」「裏事情」をまざまざと経験したからでした。

ある時、自分のその苦悶を上司にぶつけました。返ってきた言葉は

「病院も俺たち薬剤師も、薬で生計を立てている。太田のその疑問はそのとおりで、疑問を持ち続けることは薬剤師を否定することになる。」

9年勤めた西洋医学の現場を離れる。20代最後に出した結論でした。

30代は「漢方業界」に疑問を感じ苦悶しました。

薬剤師であることに悩み続け、理想とする生き方を歩めない自分。ならば長崎に戻って独立起業するしかない！と決意し、太田東西薬局を開業したのが31歳の時。西洋医学は対症療法。病気を根本から解決するものではないという確信はあったものの、反対側の東洋医学の漢方業界も例外ではなかったことに幻滅し、再び苦悶するのでした・・・。

対症療法とは、「〇〇病には△△薬」。病気・症状の数だけ薬を重ねていく治療のことです。高血圧にはこの薬、高コレステロールにはこの薬、血糖値にはこの薬、心臓にはこの薬、肝臓にはこの薬、ひざの痛みには・・・その結果が「薬漬け医療」。おまけにコロナからの「ワクチン漬け」。

そんな西洋医学の治療に疑問を覚え、東洋医学の生業に腰を据えたのに
高血圧にはこの漢方、夜間頻尿にはこの漢方、神経痛にはこの漢方・・・
資本主義（お金）を基盤する「東西」の医療に、再び苦悶するのです。
その苦しみから脱却するため、30代は一番勉強し、一番仕事しました。
その甲斐あって、なぜ人は病気をするのか？なぜ病気が治らないのか？

「病気は関係性の中で発生している」。その答えを見出せました。

病気で悩んでいる人だけを、その人の今だけを考えても根本から治せない。
その人の今の関係性、過去からの関係性を掴むことが根本解決につながる。

東洋医学の名医の本に選出されたこともあり、ちょっとした人気となって
30代は勉強会の講師活動で全国を飛び回っていました。医療に対して
同じような疑問を持った薬剤師たちと出会えて、私の苦悶は減りました。

40代は「社会」に疑問を感じ苦悶しました。

40歳、開業10年を迎え、およその自信と信頼を得ることができましたが
何かがおかしいという疑問は、減るところか増える一方でした。

この世は、欲と不安と恐怖を煽っての金儲けピラミッド社会。

人は不安な時、怖い時、寂しい時、何かに依存しようとする。

ならば、「絶対安心」をお客様につくってあげたい。メディアや権威に
依存することなく、自立して生きてほしいと願って、漢方処方自ら創作
しました。それが「麻垂耶」「アシュール」。

多くの相談者に喜びと安心感を提供できて、薬剤師になった20代の自分
への疑問・苦悶は、いつしか無くなっていました。

50代は「生死」に疑問を感じ苦悶しました。

50代を迎えても、新しい疑問と苦悶はとどまることを知りません。

結局、どんなに病気を治すことに頑張っても、所詮、死は避けられない。
お客様の死、家族の死を数々体験して、限界と虚無感に苦悶しました。

一方で今の医療はとにかく延命、長生きさせようとする。何かがおかしい。

「いかに生きるか」から「いかに死ぬか」に着眼点がシフトしました。

ゴール（死）を忘れず恐れず、今を生きて行く。目指すは「有終の美」。

そして「自然死」。最小限の医療と介護を受けて、自然に枯れ果てていく

（逝く）。その覚悟を持てた時、死への不安は無くなり、今の生が輝く。

感謝と満足で目を閉じるために今を生きる。看取り士になった動機です。

常識を疑う生き方は、時に多くの誤解や批判を受けましたが、そんな私を信じてくれたお客様たち、そして家族に救われて来ました。
 世の中を疑い、理不尽に悩み、苦から脱却するために学び続ける。
 そのおかげで、人並み以上の知性・教養・人脈を得たと自負しています。
 長く薬局をご利用くださっているお客様は、私の問題解決能力、そして行動力とユーモアに惹かれて継続して下さっていると思っています。
 心身の健康・自立・安心を提供することが私の使命ですから。

「生きていてもよし、死んでもよし」。「一人でもよし、一緒でもよし」。
 それが目指す私の人生観。そんな勇氣ある、こだわりのない生き方。
 まずは私がお客様の見本となつてまいります。
 安心は与えてもらうものではなく、自分の中に築き上げるもの。
 漢方で安心を得るのではなく、漢方で安心を築き上げていくのです！
 本年もどうぞよろしくお願ひいたします。



3歳 この頃から女装(^_^)



小学生 この頃から人前に立つ(^_^)



大学4年 卒業アルバム(^_^)



20代 大学病院時代



太田東西薬局開業1年目



講師として全国を回った30代



40代 薬局20周年記念パーティー



50代 ハーフマラソンに挑戦



50代最後のお正月ビール